

近代日本に於ける中国白話小説の受容について

——伊藤貴麿の翻訳・受容活動を中心として——

勝山 稔・井上浩一

はじめに

筆者（勝山）は中国文化の日本受容に関する考察の一環として、明治時代以降の民間翻訳に関する事例研究を試みている。これまで拙稿では明治・大正時代における受容のアウトラインを概観してきたが、本稿では伊藤貴麿（一八九三～一九六七）による翻訳活動と、彼による児童書を中心とした受容活動を検討することとしたい。

伊藤貴麿（以下「伊藤」と省略）に関する先行研究は、齋藤襄治・鏡味國彦や池田美桜等がある。それらは、「新感覚派」の文学運動の一環として取り上げられ^二、後半生における児童文学での活動が言及^三されているが、彼の取り組んだ中国白話小説の翻訳活動は、等閑視されたままである。

そのため本論では、従来の研究で検討されていなかった伊藤の中国白話小説の翻訳・受容活動に注目したい。

なお、伊藤は「三言」を中心とした短篇白話小説集の翻訳を試みる一方で、長篇白話小説『西遊記』の翻訳と受容も積極的に手掛けている。そして中国白話小説の受容史の視点から見れば、彼の業績のメインは、後者である『西遊記』の受容・翻訳活動にある。その

ため長篇白話小説を専門としている東北大学高度教養教育・学生支援機構講師の井上浩一氏に共同執筆を依頼し、伊藤による文化受容活動を、勝山が短篇白話小説から、そして井上が長篇白話小説からという両方面からアプローチを行うこととしたい。

これにより、先行研究では看過されてきた伊藤による受容活動を明確化し、明治以降における文化受容活動の一端を明らかにしたい。

一 伊藤貴麿について

本論で扱う伊藤は、本名伊藤利雄^{じゅう}。明治二六（一八九三）年に現在の兵庫県神戸市に生まれた。一九二〇年に早稲田大学英文科を卒業し、中国へ渡航している。同年、文学同人誌『象徴』に参加。その後は『早稲田文学』『文藝春秋』等に小説・評論等を寄稿していたが、一九二四年、新感覚派の同人誌『文藝時代』に参加、短編小説集『カステラ』（春秋社、文藝春秋叢書四）を刊行した。そして『文藝時代』参加の時期と同じくして、一九二六年に『支那文學大観』中で『今古奇觀』の翻訳を発表する。

彼は小説創作の傍らで児童雑誌『赤い鳥』・『童話』などに童話を

発表しているが、『文藝時代』廃刊後の一九二九年、「少年のかなしみ」で雑誌『童話文学』に参加してからは、専ら童話の領域が彼の活躍の舞台となった。『童話文学』及び、その後雑誌『児童文学』では、主に彼自身が創作した童話を発表し、一九三六年にそれらを文芸童話集『龍』（鳩居書房）に纏めたが、その後は児童文学の創作から一転して、児童向けの翻訳作品を相次いで発表するようになった。それらが一九四〇年のメレディス『アクリスの剣』（童話春秋社）、一九四一・四二年の『新譯』西遊記^三（同上）、一九四三年の支那童話集『孔子さまと琴の音』（増進堂、大東亜圏童話叢書）である。

戦時中のためか、入社した電通での中国語雑誌『大東亜公論』『大東亜文学』の編纂に専念したためか、一九四四・四五年には一時期筆が途絶えたが、終戦後の一九四六年に（謝）冰心「愛の詩」の翻訳を発表したのを皮切りに、中国の小説・児童文学・民話を題材とした児童向けの翻訳を再開し、その後も（謝）冰心『最後のいこひ』（増進堂、一九四六年）、『中国童話集 神童ものがたり』（愛育社、愛育文庫一〇五、一九四七年）、『少女少女のための今古奇観 ほたんの女神』（国民図書刊行会、一九四八年）、『中国童話集 春風と夏雨』（香柏書房、一九四九年）などを陸統と刊行した。

なお伊藤の代表作である『西遊記』の翻訳は、『新譯』西遊記』を元に、岩波少年文庫版『西遊記』（一九五五年）が刊行され、これが、現在まで読み継がれている。

そのほかにも『三國志通俗演義』や『水滸傳』などの中国小説、米星如『仙蟹』・張天翼「好兄弟」などの中国児童文学、林蘭『瓜王』・谷万川『大黒狼的故事』などの中国民話集を題材に翻訳を続け、一九五八〜六二年にかけて刊行された講談社『少年少女世界文

学全集』では編集委員も務めた。また、創立当初（一九四六年）から所属した児童文学者協会では、晩年、名誉会員に推されている。一九六七年没。享年七四歳である。

二 伊藤による中国短篇白話小説『今古奇観』の翻訳

伊藤による中国古典小説の受容を概観すると、①短篇白話小説『今古奇観』の翻訳と、②長篇白話小説『西遊記』の翻訳と児童書への翻訳（抄訳）に大別できよう。本章では、まず彼による「三言」「二拍」所収篇の選集・『今古奇観』の翻訳について検討したい。

『支那文學大観』については既に拙稿^四があるため、『支那文學大観』刊行の経緯についてはそれに譲り、ここでは『支那文學大観』に収録された伊藤の翻訳について考察を行いたい。

『支那文學大観』（一九二六年）は、当時各地の出版社が競って刊行されていた漢文叢書——例えば『漢籍國字解全書』（一九〇九年）^五、『漢文大系』（一九〇九年）^六、『漢文叢書』（一九一九年）^七、『國譯漢文大成』（一九二二年）^八より後発に位置したこともあり、独自性を出すべく従来の中国文学叢書に著録されることが少なかった戯曲や小説を中心としたものである^九。『今古奇観』の他には第二・第三卷（『牡丹亭還魂記』）、第四卷『風箏誤』、第五・第六卷（『桃花扇』、第八卷（『唐代小説』）、第一〇卷（『剪燈新話』）、第一二卷（『聊齋志異』）が刊行された。

『今古奇観』の翻訳篇は合計五篇で、篇名及び翻訳者は以下の通りである。

- ① 佐藤春夫「花つくりの翁（灌園叟）」
〔『今古奇観』巻八「灌園叟晩逢仙女」〕
- ② 伊藤貴麿「恨は長し（王嬌鸞）」
〔『今古奇観』巻三五「王嬌鸞百年長恨」〕
- ③ 今東光「珠を擲つ（杜十娘）」
〔『今古奇観』巻五「杜十娘怒沉百寶箱」〕
- ④ 伊藤貴麿「李汧公（李汧公）」
〔『今古奇観』巻一六「李汧公窮邸遇俠客」〕
- ⑤ 佐藤春夫「願事叶う（賣油郎）」
〔『今古奇観』巻七「賣油郎獨占花魁」〕

このように三名の訳者を擁したが、何れも当時駆け出しの小説家・随筆家であり、支那愛好家である佐藤春夫を除けば、伊藤も今東光も中国文学の専門家ではない。無論全くの門外漢が翻訳を手掛けたというのではなく、伊藤は『（新譚）西遊記』（童話春秋社）をはじめとした『西遊記』の翻訳・翻案^{〔上〕}で著名であり、今東光も本書刊行の前年に『桃花扇』の翻訳^{〔下〕}を発表し、後年は易学に関する著作を刊行^{〔下二〕}している事でもその一端はうかがえよう。なお註釈は東洋協会大学（現拓殖大学）教授の宮原民平が担当している。

ここで伊藤による翻訳状況を検討すべく、訳文を若干紹介したい。まず伊藤の翻訳「恨は長し」であるが、当時『今古奇観』巻三五「王嬌鸞百年長恨」は先行する翻訳が確認出来ない。その冒頭部分であるが、

話說江西饒州府餘幹縣長樂村、有一小民叫做張乙。因販些雜貨

到於縣中、夜深投宿城外一邸店、店房已滿、不能相容。①間壁鎖下一空房、卻無人住。張乙道、『②店主人何不開此房與我。』主人道、『此房中有鬼、不敢留客。』張乙道、『便有鬼、我何懼哉。』主人只得開鎖、將燈一盞、掃帚一把、交與張乙。③張乙進房、把燈放穩、挑得亮亮的。房中有破牀一張、塵埃堆積、用打帚掃淨、展上鋪蓋、討些酒飯喫了、推轉房門、脫衣而睡。夢見一美色婦人、衣服華麗、自來薦枕、夢中納之。及至醒來、此婦宛在身邊。張乙問『是何人。』此婦道、『妾乃隣家之婦、因夫君遠出、④不能獨宿、是以相就。勿多言、又當自知。』

〔さて、江西の饒州府は餘干県長樂村の住人に張乙という者がいた。雜貨の行商をやっていて、県城へ出掛けたさい、夜もだいぶ遅くなってから城外の宿屋にはいったところ、部屋が全部ふさがっていて泊められないという。と、①隣りに錠をおろしたままの部屋があつて、誰もはいつていないので、②ここが空いているじゃないか〕

③部屋にはいつて手燭を置き、芯をかきたててみると、中には埃のつもつたぼろぼろの寝台が一つぼつんと置いてあるばかり。ほうきで埃を払い、布団を広げると、酒や飯を取り寄せて食事を済ませ、戸を閉めて床にはいった。うとうとしたかと思うと、着飾った目のさめるような美女が現われ、自ら夜伽をしたいと

それではと、主人は錠をはずし、手燭とほうきを張乙に渡した。③部屋にはいつて手燭を置き、芯をかきたててみると、中には埃のつもつたぼろぼろの寝台が一つぼつんと置いてあるばかり。ほうきで埃を払い、布団を広げると、酒や飯を取り寄せて食事を済ませ、戸を閉めて床にはいった。うとうとしたかと思うと、着飾った目のさめるような美女が現われ、自ら夜伽をしたいと

いうので、夢うつつのなかで枕をかわしたものだだったが、目が醒めてみると、その女がまだかたわらにいる。誰かを探ねると、「わたくしは隣りの家の者です。夫が旅に出ているもので、④寂しさのあまりこうしてしまつたもの。いずれはおわかりになることですから、これだけで、ご勘弁ください」^{十三}

その箇所を、伊藤は以下のように翻訳している。

さて、江西省饒州府の餘干縣長樂村に張乙と呼ばれてゐる餘り豊かでない男があつた。或る日僅かばかりの雜貨を販賣する爲に、縣中に出かけて行つて、夜更けてから城外の旅籠に投宿したが、部屋が一ぱいで泊れない。ところが①壁を隔てて一間空いた部屋が閉め切つてあつて、一向人が住んで居ないやうだつたので、張乙が云つた。

『②店主、どうしてこの部屋を開けて、私に貸して下さいのぢや。』
主人は云つた。

『此の部屋には幽霊が出るので、お客さんを入れませんのぢや。』
『何の、幽霊が出ておかまつたことはありませんや。』

主人は是非なく扉を開き、一臺の燈りと一本の箒とを張乙に渡した。③張乙は部屋に這入つて、燈りをつけて照らしたので、邊りは明るくなつた。部屋の中には破れ床が一張りあつて、塵埃にうづもれて居る。彼は箒で淨めて、夜具を敷き、少量の酒と食べ物とを貰つて喰べ終つたので、部屋の扉を押しやつて、着物を脱いで眠つた。すると、夢に一人の眉目美しい婦人が現

れた。着て居る物も立派で、自分の方から遣つて来て、枕席に侍らうとするので、夢現にこれに應じたのであつた。醒めてからもこの婦人は傍に居るので、

『どなたですか。』

と張乙は訊ねた。婦人は云つた。

『妾は隣りの妻女ですが、夫が遠くへ出かけたので、④獨りで寝むことが出来ず、それで參つたのです。何も言はないでも、其のうちに解りますわ。』^{十四}

原文にある傍線部①「間壁鎖下一空房、卻無人住」であるが、「間壁 (jie bi)」は、隣・隣家・隣の部屋の意味であり、「隔壁 (ge bi)」と同じく壁一重で隔てられている隣室のニュアンスが強く、独立した隣家とは若干意味が異なる。そのためここでは「隣室の鍵のかかった誰も宿泊していない空き部屋」の意味である。そこを伊藤は「壁を隔てて一間空いた部屋が閉め切つてあつて、一向人が住んで居ない」と訳出しており、「間壁」を極めて的確に訳出している。また原文の傍線部②にある「店主何不開此房與我」は、張乙が宿屋の主人に問い掛ける直接話法の場面である。「何不 (he bu)」は反語表現の副詞で「なぜ〜しないのか (〜すべきである・〜してよい)」の意味であり、反語は「與我 (yu wo)」——私に貸し与えるまでかかるとの語義を忠実に反映させると「ご主人、なぜこの部屋を開けて私に貸し与えないのか。(いやこの部屋を開けて私に貸し与えるべきである)」の意味である。ここで伊藤は「店主、どうしてこの部屋を開けて、私に貸して下さいのぢや」とあり、反語的表現のニュアンスを含めて正確に翻訳している。また原文傍線部③にある「張乙

進房、把燈放穩、挑得亮亮的」であるが、張乙は部屋に入り、灯りを「放穩（しっかりと立てて）」した上で「挑得亮亮的」とある。この文節はやや難解であるが、ここでの「挑」は一般的な「挑（tiāo）担ぐ」ではなく、「挑（tiào）ほじくる」であろう。となれば、「挑」したのは、ろうそくの芯である。そのため「張乙は部屋に入り、灯火をしっかりと立て、（灯火の芯を）ほじくり灯火を明るくした」のである。ここで伊藤は「張乙は部屋に這入つて、灯りをつけて照らしたので、邊りは明るくなつた」とあり、やはり「挑」の語釈に難儀しているのが想像できる。

そして原文傍線部④「不能獨宿、是以相就」とあるが、「相就（xiāng jiù）」が不明である。或いは「相住（xiāng zhù）」の誤記とも思われるが、「一人で部屋に居ることが出来ないので、一緒に部屋に（就）することにした」という意味である。ここで伊藤は「獨りで寝むことが出来ず、それで參つたのです」とあり、「相就」の訳出に戸惑いながらも可能な限り文脈に従って無難に翻訳している。

次に伊藤訳の「李汧公（李汧公）」（『今古奇觀』卷一六「李汧公窮邸遇俠客」）を紹介する。

話說唐玄宗天寶年間、長安有一士人、姓房名德、生得方麵大耳、倅幹豐軀。年紀三十以外、家貧落魄、①十分淹蹇、全虧著渾家貝氏、紡織度日。時遇深秋天氣、頭上還裹着一頂破頭巾、身上穿着一件舊葛衣。那葛衣又逐縷縷開了、却與蓑衣相似。思想『天氣漸寒、這模樣怎生見人。』知道老婆餘得兩疋布兒、欲要討來做件衣服。誰知②老婆原是小家子出身、器量最狹、却又配着一副

悍毒的狠心腸。那張嘴頭子、又巧於應變、賽過刀一般快。

（さて、唐の玄宗皇帝の天寶年間、長安に、姓は房、名は徳という書生がいた。生れつきの角ばった顔に大きな耳、背は高く、でっぷりと肥っていて、年は三十すぎだったが、家貧しく落ちぶれてはてて、①どうにもうだつがあがらず、女房の貝氏の機織りのかせぎでようやく糊口をしのいでいるありさま。もう秋も末だというのに、頭には破れ頭巾をかぶり、身には古びた夏着を着ているだけで、その夏着も、ぼろぼろにほころびていて、まるで蓑のよう。だんだん寒くなるのに、こんなさまでは人に会うこともできやしない。そうだ、女房が布を二、三匹蓄えているから、あれをもらつてきものをこしらえたいものだ、と考えた。ところが②女房は、賤しい家の出で、料簡がせまく、おまけに荒っぽい気性、その口さきの達者なことといったら、刀よりも鋭いくらいであった）（駒田信二『今古奇觀（上）』平凡社中国古典文学大系三七、一九七〇。二九二～二九三頁参照）

その箇所を伊藤は、以下のように翻訳している。

さて、唐の玄宗の天寶年間に、長安に一人の書生があつた。姓は房、名は徳と云つた。生れつき顔が四角く耳が大きかつた。そして背丈は高くでつぷりして居た。年は三十を過ぎて居たが、落ちぶれて家は貧しく、①全く手も足もないさまであつた。で、すべて妻の貝氏のおかけを蒙つて居た。彼女は紡いだり織つたりして其の日をすごして居た。

丁度頃は秋も末になつたといふのに、彼はなほ頭上に一箇の

破れ頭巾を頂き、身には一着の古い夏衣なつものを纏うて居るばかりであつた。然し其の夏衣なつものもぼろぼろに綻び破れて、寧ろ蓑かさに類して居るといつた方があつて居た。彼は思つた。——氣候も追追寒くなつて來たのに、こんなざまでは人に逢うてもみつともない。——そこでふと、宅の妻が數疋の布を蓄へて居るのを思ひ出して、取出して着物にしたいものだと思つた。が、何しろ

②婆おばさんはもともと長屋育ちで、人間が小さく、其の上に腹の恐おそしい質ちかで、口前くちまえと云へばお上手を通り越して、刀劍のやうに鋭いのであつた。〔十五〕

原文傍線部①「十分淹蹇」であるが、「淹蹇 (yānjiǎn)」は書面語で「境遇が困窮して意を得ない・不如意である・失意する」を意味する。そのためここでは「(房徳は) 困窮してうだつが上がらない」が妥当であろう。その箇所について伊藤は「全く手も足も出ないさまであつた」と訳している。ここでの「手も足も出ない」は力が足りなくて、処理しようがない事。どうしようもないこと。つまり自分の能力を遙かに超えていて、施す手段が何も無い事を意味する。そのため、張乙の境遇についての的確な言及が行われず、ややニュアンスが異なる。

また原文傍線部②「老婆原は小家子出身、器量最狭、却又配着一副悍毒的狠心腸」についてであるが、「器量 (qìliang)」は度量、器量、心の広さを意味し、「悍毒 (hàn dú)」は書面語で、猛々しい・凶暴である、そして「狠心腸 (hěn xīn cháng)」は「むごい心、薄情である。そのため、「女房は実は賤しい家の出身で、心が狭く、更にまた薄情の気性を合わせ持っていた」というのが原義である。その箇所を伊

藤は「婆おばさんはもともと長屋育ちで、人間が小さく、其の上に腹の恐おそしい質ちかで」と訳しており、「老婆 (女房)」を婆さんと誤訳しているが、「却又配着一副悍毒的狠心腸 (おまけに荒っぽい気性)」を、「腹の恐おそろしい質」とほぼ正確に翻訳を施している。

以上『支那文學大觀』所載の短篇白話小説『今古奇觀』の伊藤による翻訳「恨は長し (王嬌鸞)」と「李汧公 (李汧公)」について、原文と対照しつつ翻訳状況を検証した。

検討作業の結果、伊藤は概ね原文に忠実であり、一部の語釈で難解語に難儀する場面が見られるが、文脈を考慮して文意に齟齬のないよう配慮しながら翻訳している。また原文を尊重した上でルビを備えるなど、今回は原文を尊重して翻訳しようと試みた意図がうかがえる。

三・伊藤による中国長篇白話小説『西遊記』の翻訳

三―一 伊藤訳『西遊記』とその価値

伊藤による数々の訳業の中で特筆されるものとして、『西遊記』の翻訳がある。例えば『日本児童文学大事典』の「伊藤貴磨」の項目「執筆・関英雄」は、『西遊記』の翻訳を「伊藤の代表的訳著」〔十五〕としている。この伊藤が訳した『西遊記』は、代表的なものだけでも以下のような七種が挙げられる。

- ① 『新譯』西遊記 (上・下) 〔十七〕 (童話春秋社、一九四二・一九四二)
- ② 『西遊記物語』 (世界名作物語) (童話春秋社、一九四九) 〔十八〕
- ③ 『西遊記 (全三冊)』 (岩波少年文庫九〇～九二) (岩波書店、

一九五五) 一九

- ④ 『中国童話集』(世界童話文学全集一四)(講談社、一九六〇)
- ⑤ 『三国志／西遊記』(世界名作全集二)(平凡社、一九六〇)
- ⑥ 『少年少女世界の名作文学(四四・東洋編三)』(小学館、一九六五) 二七
- ⑦ 『西遊記』(少年少女講談社文庫A七四)(講談社、一九七九)

なお、これら伊藤の訳した『西遊記』の中で、西遊記翻訳史において画期と目されるのは、①『(新譯)西遊記(上・下)』(以下「新訳」)である。これについては、井上の拙稿^{二二二}で既に論じている。



斯界では意外に知られていないが、伊藤以前の『西遊記』翻訳——とりわけ児童書における翻訳は、多くが『西遊記』の原本からではなく、江戸時代に刊行された翻訳書『画本西遊全伝』を元に書かれていた^{二二二}。

この『画本西遊全伝』は、孫悟空の誕生から三蔵一行が取経を果たし神仏となるまで、『西遊記』の全ての回の内容を具えている一方、細々としたストーリーや会話などは、かなり削除・圧縮されている。伊藤は、この『画本西遊全伝』について新訳の「はしがき」で次のように述べている。

この譯書は、後、博文館の帝國文庫や、有朋堂文庫や、葵文

庫などに收められて活字本となり、一番廣く吾人にしたしまれ、從來は西遊記とさへ言へば、本書にかぎられた觀があつたのであります。が、實は本書は、量にして全體の四分の一くらゐの甚しい抄譯本で、これを以てしては、原作の一般をうかがふに足るものであるとは、言ひ難いのであります。(中略)舊譯書(筆者注・画本)に於ては、餘りに量を壓縮せんとしたために、會話體を短い筋書的な説明文にかへてしまつたので、幽默や諧諷等は全部失はれてしまつてゐます。

このように、量の圧縮によって削除されたユーモアや諧諷部分に『西遊記』の価値があると考えた伊藤は、『画本西遊全伝』ではなく、方明改編『西遊記』を元に翻訳を試みている^{二二三}。

方明改編『西遊記』は、一九三三年から一九三七年にかけて商務印書館から刊行されたもので、『画本西遊全伝』で削除されたユーモアや諧諷を多分に残している(以下「方明本」とする)。伊藤は新訳の「はしがき」でこのように続けている。

いさゝかでも舊譯書の缺を補はんと期し、量に於ては、ほんこの大作の全般をうかゞふに足るだけの分量とし、なるべく會話體を存し、未譯の多くの個所を加へ、全篇至る所に出て來る、聖人の格言や、興趣ある俗諺の多くを採りいれることに致しました。

このように『画本西遊全伝』の欠点を補完すべく方明本を採用した翻訳の結果、伊藤の訳は広く読者に受け入れられるようになったの

であろう。その事実は、岩波少年文庫『西遊記』が現在に至るまで読み継がれている点や、原本の完訳を最初に成し遂げた、太田辰夫・鳥居久靖訳『西遊記』（中国古典文学全集一三・一四、平凡社、一九六〇年）の「あとがき」で、岩波少年文庫『西遊記』について「訳筆もこなれており、わたしたちも部分的に参看して、訳語などにつき教えられるところがあつた」と述べられていることから理解できよう。

三―二 伊藤訳『西遊記』の特徴

前項では、伊藤が方明本を底本に用い、「なるべく會話體を存し、未譯の多くの箇所を加へ、全篇至る所に出て来る、聖人の格言や、興味ある俗諺の多くを採りいれ」た訳語を作成しようとして意図したことを述べた。その結果伊藤の訳語は、具体的にどのようなものになったのであろうか。ここでは伊藤訳（新訳）の特徴を、①原文をどの程度逐語訳しているのか、②語意をどの程度正確に把握しているか、という二つの面から検討したい。

ここでは伊藤の訳語のほか、伊藤の訳語と同時期に刊行された佐藤春夫訳『西遊記』（新潮社、一九四四年。以下「佐藤訳」^{二四}）を比較対象として検討することとしたい。

例えば『西遊記』第三回「四海千山皆拱伏 九幽十類盡除名」の一節、孫悟空が自分に合った武器を手に入れるため、東海龍王のもとへと出発する場面がある。その原文は左掲のごとくである。

好猴王、跳至橋頭、使一個閉水法、捻著訣、撲的鑽入波中、

分開水路、徑入東洋海底。正行間、忽見一個巡海的夜叉、擋住問道、「①那推水來的、是何神聖。說個明白、好通報迎接。」悟空道、「吾乃花果山天生聖人孫悟空、是你老龍王的緊鄰、②爲何不識。」那夜叉聽說、急轉水晶宮傳報道、「大王、外面有個花果山天生聖人孫悟空、口稱是大王緊鄰、將到宮也。」東海龍王教廣即忙起身、③與龍子、龍孫、蝦兵、蟹將出宮迎道、「④上仙請進、請進。」

（す）いぞ！悟空、橋のたもとまでビヨンと跳ぶと、閉水の法てえのを使います。印を結んだままドボンと波間にもぐりこみ、水路をかき分け、そのまま東海の海底をめざします。すると、いきなり水中巡回の夜叉が悟空のゆくてをさえぎりました。

「①水をかき分けているのは、どちらの仙人ですか？ はつきりおっしゃれば、奥にお知らせして、お出迎えいたさせます」

悟空、「我輩はな、花果山の生まれながらの聖人たる孫悟空である。お宅の龍王のすぐの隣人だというのに、②わからんのか」聞くなり夜叉は水晶宮にひき返し、報告いたします。

「大王さま、外に、花果山の生まれながらの聖人たる孫悟空とやらが、大王さまのすぐの隣人だと称して来ております。ほどなく宮殿に到着するはずですよ」

東海龍王の教広、すぐに身を起こすや、③息子や孫、それに蝦兵士に蟹將軍ともども宮殿の外まで出迎えます。「④これはこれは、仙人どの。さ、どうぞおはいりください」^{二五}

なお、この箇所は伊藤訳の底本である方明本と、佐藤訳が底本として用いたと思われる『西遊記』の原本^{二六}との異同が特に少ない

部分である。この箇所を、まず伊藤は次の様に訳している。

悟空は橋の上に立つて、閉水の法を行ひ、祕法を唱へて、ざんぶとばかり海中に飛入り、水を分けて、東洋海の底へやつて来ると、忽ちみまはりの巡海夜叉に逢ひました。彼は悟空をとめて言ひました。

「①水を分けておいでになつたのは、どなた様ですか。お名前を明し下さらば、御案内いたしませう。」

「それがしは、花果山の天生聖人孫悟空と申す者で、そちの主の龍王の近所の者であるが、②そちにはわからぬか。」

さくより夜叉は、急いで水晶宮に駆けつけて、報告して言ひました。

「大王様、花果山の天生聖人孫悟空と申される方が、大王様の近所の者だといつて、表に參られてをります。」

東海龍王の敖廣は、早速③數多の家來を引きつれ、恭しく出迎へて言ひました。

「④よくこそ、おいで下されました。どうぞ、どうぞ。」

一方、比較対象となる佐藤訳は、同じ部分を次のとおり訳している。

美猴王は橋のあたりから飛びこんで、閉水の法といふのを使つて、術をほどこしたので無難作に波のなかへもぐりこんだが、水中の路は自然に開けてすぐさま東方の大海の海そこへ入つた。まつすぐに歩いてゐると、ふいに海を見まはる鬼が一匹あらはれ、前方に立ちふさがつて問ふのであつた——

「①水をおしわけて進んで来られるのは、どんな神さまでいらせられますか。はつきりお名告り下さい。お取次をしてお出むかへいたさせたく存じます。」

といふので、悟空は答へていふ——

「わしこそ花果山の天生聖人孫悟空といふ者だ。お前のところの竜王さまとはこの上なしの御近所づき合ひなのに、②なぜ見おぼえておかないのか。」

鬼はこれ聞いて、大あわてに水晶宮へころがり入つて報告をおつたへ申す——

「大王さま、表に花果山天生聖人孫悟空がお見えです。自分では大王さまとは、この上なしの御近所づきあひと名告つて、たゞ今御殿にまゐるところでございます。」

東海竜王の敖廣はいそぎ立ち上つて③竜の子や竜孫や、えびの軍兵や、かにの部隊長などを引きつれて御殿からお出むかへなされ、

「④これは仙人さま、さあどうぞ、さあどうぞ。」

一読して、佐藤訳は、伊藤訳に比べると原文に忠実で逐語的な翻訳が行われていることが理解出来る。

例えば、傍線部①「那推水來的、是何神聖。説個明白、好通報迎接(水を分けてやって来られたは、いずれの神仙か。お名のりあれば、お迎へするよう知らせてまいります)」を、佐藤訳は「水をおしわけて進んで来られるのは、どんな神さまでいらせられますか。はつきりお名告り下さい。お取次をしてお出むかへいたさせたく存じます」としている。このように佐藤訳は「推水(水を押し分ける)」など日

本語には馴染みにくい表現も、原文表現を尊重して表記したほか、「説個明白」の「明白（はつきりと）」などの語まで、一語一句漏らさず逐語訳している。

それに対して伊藤訳は「水を分けておいでになったのは、どなた様ですか。お名前を明し下さらば、御案内いたしませう」としている。比較対象の佐藤訳では「推水（水を推し分ける）」とした原文の表現に従ったが、伊藤訳は「推水」を「水を分ける」と、日本語として馴染みややすい表現にまとめている。また「是何神聖」の「神聖」の語を訳さず「どなた様」とし、「好通報迎接（お迎えするよう知らせてまいります）」の部分も「御案内いたしませう」と、出迎えるよう伝えるのではなく、夜叉自身で案内するように表現の簡略化が行われている。

また、下線部②「爲何不識（見知らぬという法はあるまい）」の部分は、「何不（なぜ〜しないのか）」の反語表現の解釈が関鍵となる。この箇所を佐藤訳が「なぜ見おぼえておかないのか」と「何不」を正確に理解しているのに対し、伊藤訳は「そちには（なぜ）わからぬか」としており、やや丁寧さに欠ける。

そして、傍線部③「與龍子、龍孫、蝦兵、蟹將」の箇所は、佐藤訳が「竜の子や竜孫や、えびの軍兵や、かにの部隊長などを引きつれて」とするのに対し、伊藤訳では「數多の家來を引きつれ」と、原文の「龍子、龍孫、蝦兵、蟹將」の冗長箇所を一括して「數多の家來」と省略している。

このように、佐藤訳が逐語的な翻訳であるのに対し、伊藤訳は原義に準拠しながらも内容の簡略化が図られる傾向が見られる。そのほか、省略箇所も散見され、決して一語一句漏らさず訳したもので

はないことがわかる。

以上が伊藤訳の概要である。『西遊記』原本から直接翻訳を試みた可能性が高い佐藤訳とは異なり、『西遊記』原本↓方明本↓伊藤訳（新訳）のごとく、伊藤が日本語へ翻訳する以前に、白話文から現代中国語への翻訳が行われており、言わば伊藤訳は『西遊記』原本の重訳に該当するのである。そのため原文からそのまま伊藤訳を比較した場合、方明本の翻訳傾向を確認しなければならぬという課題が残る。しかし、方明本↓伊藤訳における翻訳状況を確認すると、一つの意外な事実が判明する。

例えば前述の『西遊記』第三回「四海千山皆拱伏 九幽十類盡除名」の一節、孫悟空が自分に合った武器を手に入れるため、東海龍王のもとへと出発する場面を一例に用いて説明したい。原文は前掲のごとくであるが、その箇所を、方明本ではこのように記している。

好猴王、跳至橋頭、使一個閉水法、捻著訣、撲的鑽入波中、分開水路、徑入東洋海底。正行間、忽見一個巡海的夜叉、擋住問道、
 「①那推水來的、是何神聖。說個明白、好通報迎接。」悟空道、「吾乃花果山天生聖人孫悟空、是你老龍王的緊鄰、②爲何不識。」那夜叉聽說、急轉水晶宮傳報道、「大王、外面有個花果山天生聖人孫悟空、口稱是大王緊鄰、將到宮了。」東海龍王教廣即忙起身、
 ③與龍子、龍孫、蝦兵、蟹將出宮迎道、「④上仙請進、請進。」

つまり、この部分においては、傍線部以外の箇所（引用六行目）で、「也」の文字を方明本では「了」と改めただけで、それ以外は一語一句原作と違わない。そのため方明本の段階では原文を殆ど改変され

ていないと判断できるのである。

(2) 伊藤訳の特徴について

前項では方明本から伊藤訳へという翻訳傾向を探り、方明本の段階では原文を改変されていないことが判断できた。それを踏まえた上で本項では伊藤訳の正確性について検討したい。前述のとおり、伊藤訳は一語一句漏らさず訳したものというよりは、しばしば簡略化や意訳、省略も交えた翻訳となっており、これを根拠に「不正確」ととらえるならば、正確性が低いといえるかもしれない。しかしその一方で、語意を取り違えた誤訳は少ないように思われる。

例えば、前項で引用した傍線部④に、龍王が「上仙請進、請進」と孫悟空を宮中に招き入れた後、龍王が悟空に「上仙幾時得道（仙人どのには、いつ、得道なされたのですかな）」と尋ねる場面があるが、これを佐藤は「仙人さま、御修行にはどれほど、年月がかかりましたらうか」と、修行期間の長短を尋ねるように訳している。しかし、「幾時」は、伊藤が「上仙は、いつ、道を得られ」と訳すっており、時期を問う意味であり、現代の中国語でも「幾時走（いつ、出発するの）」と用いられる通りである。

佐藤訳には、このような原義の語意を誤認した箇所があり、孫悟空が如意金箍棒と装束を入手して、龍王の宮殿を立ち去るまでの場面だけでも幾つか存在する。そのような箇所を以下に三箇所ほど挙げて、伊藤訳との比較を試みたい。

まず、『西遊記』第三回には、孫悟空が龍王に自分に合う武器を求めてやってきたことを告げる場面がある。龍王は最初に大刀を、次

に九股叉という三千六百斤ある武器を出す、悟空が軽すぎると言ったため、七十二百斤もある方天戟を持って来させた。しかし悟空が「まだまだ軽い」と言い、続けて、

⑤老龍王一發害怕道「上仙、我宮中只有這根戟重、再沒甚麼兵器了。」⑤竜王はますますこわくなって、「仙人どの、それがしの宮殿では、この戟がいちばん重いのですぞ。これ以上のものは、なんにもありませんぞ」

と発言した場面がある。この傍線部⑤に「老龍王一發害怕（龍王はますますこわくなって）」という箇所がある。原文にある「發害怕（*hai pa*）」は、「害怕（恐れ）」を「發（生じる・感じる）」するという語義であるから、「おじけづいた」「怖くなった」と訳すことが自然であろう。伊藤はこの箇所を「龍王はいよいよおじけ、けを振るつて」と的確に訳しているが、これを比較対象である佐藤は「竜王も少々、気にさはつたらしく」と訳している。「気にさはつた」は「いやな気持ちを引き起こさせる。感情を害する」という意味であり、原義とは大きく異なる。

続いて、悟空は禹が治水に用いた神珍鉄如意金箍棒をもらい受けるのだが、悟空は装束も要求する。龍王は装束をもっていないと断るが、悟空は納得せず、装束を渡さないなら如意金箍棒の働きを試す——つまり、暴れるというのだ。慌てた龍王が「弟のところならあるかもしれない」というと、悟空は、こう尋ねている。

「令弟⑥何在」。龍王道「舍弟乃南海龍王敖欽、北海龍王敖順、

西海龍王敖閏是也」(「ご令弟は⑥どこに?」「舎弟とは、ですな、南海龍王敖欽・北海龍王敖順・西海龍王敖閏ですわい」)

傍線部⑥の「何在(he zai)」は「いづくにかある」のように場所を問う意味であり、「ありましたか」のように存在の有無を問う表現ではない。それを踏まえた上で当該箇所両者の訳を見ると、比較対象の佐藤訳は「おありでございましたか」と兄弟の存在の有無を問うており、翻訳を誤っているが、伊藤訳では「いづこにをられるか」と場所を問う意味であり、伊藤訳の方がより正確に翻訳しているのが判る。

次いで龍王は兄弟たちを呼び出し、相談をする。南海龍王・敖欽は悟空の態度に腹を立て、兵を起して悟空を捕らえることを提案するが、西海龍王・敖閏はこのように反駁している。それには、

「⑦二哥不可與他動手。且只湊副披掛與他、打發他出了門、啟表奏上上天、天自誅也。」(「⑦二哥(あにき)、やつに手をだしたらだめだよ。いまのところは、よろいかぶと一式、なんとかかき集めて、やつにくれてやり、ここから出て行ってもらうことだ。そのうえで天帝に上奏すれば、天帝が成敗してくださるだろうよ」)

とある。このように、傍線部⑦には「二哥不可與他動手(二哥(あにき)、やつに手をだしたらだめだよ)」とある。中国語では数詞である「二つ」の意味(数量)の場合、「兩」を用い、「二番目」の意味(順序)の場合に「二」を用いる。また中国語圏では現在でも一番上の兄を「大哥」

二番目の兄を「二哥」三番目を「三哥」と呼ぶ習慣があり、この箇所でもその意味で用いられていると考えるのが適当である。この箇所を伊藤は「二番目の兄さんのやうに、兵を動かすのはよくありません」と訳している。訳文にある「のやうに」は必要無いかと思われるが、少なくとも「二哥」は「兄上たち」(兄の複数形)の意味ではなく「二番目の兄」の意味である。その一方佐藤は、この箇所を「兄上たち、なるほどそ奴に手出しをするのは、よろしくはございますまい」と訳し、ここでは「兄上たち」と二人の兄の意味にしてしまっている。それに対して伊藤は、誤る事なく「二番目の」一人の兄に向けた言葉として訳している。

紙数の関係から一部の各論から傾向を抽出せざるを得ないのが心苦しいが、このように、佐藤訳で語意を誤ったと思われる箇所の箇所でも、伊藤訳では語意を正確に把握していた点は注目に値する。

伊藤訳は佐藤訳と比べた場合、全体にわたって意識したり、省略した部分があり、逐語訳とは言えない。しかし一方で、佐藤訳にあるような語義を取り違えた誤訳は少なく、「正確性」をそのような意味でとらえるならば、伊藤訳の正確さは高い水準にあったと言えるだろう。

以上、伊藤の手による翻訳について短篇白話小説と長篇白話小説の二方面からアプローチを試みた。『西遊記』の翻訳については、同時代の佐藤訳に比べて原文内容の簡略化の傾向が散見されるものの、原文に忠実な佐藤訳の誤読箇所についても伊藤訳は正確に訳出していた。なお、伊藤訳を検討する際には、伊藤訳が発表された時期の状況も考慮する必要がある。

例えば伊藤が『今古奇観』の翻訳（一九二六年）や『（新譯）西遊記』（一九四一～四二年）発表の時期には、まだ白話小説の翻訳を試みる上で必須の工具書や学術的検討が未整備であった。例えば中国語辞典についても、『支那語大辞彙』を初めとする石山福治による一連の辞書の刊行（一九〇五～一九三五年）^{〔三十七〕}や、井上翠の『井上支那語辞典』（一九二八年）^{〔三十八〕}、そして竹田復の『支那語新辞典』（一九四一年）^{〔三十九〕}が刊行されているものの、この伊藤の翻訳作業の時点では、愛知大学中日大事典編纂処『中日大辞典』（一九六八）^{〔四十〕}等の白話小説語彙にまで言及された辞書の刊行に至っていない。そのため工具書の側面での不自由さは相当のものであったことは想像に難くない。

また白話小説に関する考察も未開拓に近い状況であった。例えば概説書の刊行であるが、塩谷温による『支那文学概論講話』（一九一九年）^{〔三十二〕}がその先駆的な存在である。しかし、『支那文学概論講話』刊行の段階では、『今古奇観』の存在自体も殆ど言及されていない。その後周樹人（魯迅）による『中国小説史略』の刊行（一九二二～二四年）が行われ、魯迅の研究内容が盛り込まれた宮原民平の『支那小説戯曲史概説』（一九二五年）^{〔三十三〕}が刊行された。伊藤による『今古奇観』の翻訳刊行は、『支那小説戯曲史概説』の刊行の直後である。このまた一九二六年には、塩谷温らが『全像古今小説』・『重刻増補古今小説（喻世明言）』・『醒世恒言』等の『三言』の発見^{〔三十三〕}が公となつたばかりで、これらの研究成果はその後『中国小説史略』にも盛り込まれ、増訂版が執筆された。その増訂版が増田渉により『支那小説史』^{〔三十四〕}が発表されるのが一九三五年であり、『三言』『二拍』の内容を加筆した塩谷の『支那文学概論』の発表^{〔三十五〕}も一九四六

年である。つまり伊藤の『今古奇観』翻訳の時点では翻訳に必要となる工具書も、学術的検討も不十分な時期の訳業と言えらる。

既に拙稿^{〔三十六〕}で指摘したとおり『今古奇観』の翻訳時には『支那文学大観』刊行時の編著者に宮原民平の名前が見え原文の注釈は宮原が行っている所から、『今古奇観』の翻訳作業の時点で宮原からの学術的支援を受けた可能性が否定できない。しかし、かかる時代的な背景も考慮すれば、伊藤の翻訳の正確さは当時に於いて高い水準にあつたことは明らかなものと言えらるであらう。

結 論

以上が本論の内容である。本論の内容を要約すると、次の通りである。

I 小説家・児童文学者として著名な伊藤貴麿は、『三言』を中心とした短篇白話小説集の翻訳を試みる一方で、長篇白話小説『西遊記』の翻訳と受容も手掛けていた。

伊藤訳による『支那文学大観』所載の短篇白話小説集『今古奇観』の伊藤による翻訳「恨は長し（王嬌鸞百年長恨）」と「李汧公（李汧公窮邸遇俠客）」について翻訳状況を原文と対照しつつ検証を試みた。その結果、伊藤訳は概ね原文に忠実であり、一部の語釈で難儀を連想させる場面が見られるが、文脈を考慮しつつ文意に齟齬のないよう配慮しながら翻訳していることが確認出来た。

II 一方の長篇白話小説の翻訳である伊藤訳『（新譯）西遊記』は、それまで一般的であつた『画本西遊全伝』を底本とした諸々の『西

遊記』とは一線を画し、枝葉のストーリーや詳細な描写、会話などを残した方明改編『西遊記』を底本として翻訳していた。

Ⅲ 『西遊記』については、伊藤訳と同時期の翻訳である佐藤春夫訳と比較を行った。その結果、佐藤訳に比べて伊藤訳は原文内容の簡略化の傾向がみられた。しかし、この傾向は伊藤が翻訳の底本とした方明本に由来するものであった。また、佐藤訳で語義を誤ったと思われるいずれの箇所でも、伊藤訳では語義を正確に把握しており、佐藤訳に比べても伊藤訳の正確さは高い水準にあった。

Ⅳ 伊藤訳を検討する際には、『支那文学大観』や『(新譯)西遊記』が発表された時期の学術状況も考慮する必要がある。伊藤の『今古奇観』翻訳の時点では翻訳に必要となる工具書も、学術的検討も不十分であった。『今古奇観』の翻訳作業の時点で語積を担当した宮原民平からの学術的支援を受けた可能性が否定できないものの、十分な工具書が準備できなかった時代的な背景も考慮すれば、伊藤の翻訳の正確さは当時に於いて高い水準にあったことは相違ない。

本稿では伊藤による受容活動を分析したが、伊藤以外にも斯界に於いて従来確認されていなかった「三言」所収篇の翻訳者が近年続々と発見されてきた。次稿はこの受容の背景を分析した上で昭和期の翻訳事業で生まれた新たな動きについて検討を試みたい。

(附記) 本論文は、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)「民間の視座を導入した中国通俗文芸の受容と自国化の研究——受容文化の多角的考察を目指して」の研究成果の一部である。

注

- 【一】 山中正樹「文芸時代と川端康成——川端康成の言語観(一)——」(『桜花学園大学人文学部研究紀要』一〇号、二〇〇九年)、齋藤襄治・鏡味國彦「昭和初期の文壇とヨーロッパのモダニズム文学・新感覺派から新心理主義文学へ」(『立正大学人文学研究所年報(別冊)』六号、一九八七年)。
- 【二】 池田美桜「雑誌『日本児童文学』の果たした役割——第一次刊行期を中心に」(『国際学院埼玉短期大学研究紀要』二五号、二〇〇四年)。
- 【三】 背表紙では「新譯西遊記」となっているが、扉及び奥付では「西遊記」となっている。ここでは他の伊藤訳西遊記と区別するため「(新譯)西遊記」とする。
- 【四】 勝山稔「白話小説受容史から見た『支那文学大観』の位置付けについて——文言・白話小説の受容方法を中心に」(『国際文化研究科論集』一三三号、二〇一五年)及び「白話小説受容史から見た『支那文学大観』の位置付けについて——『支那文学大観』の停刊と共立社の関係を中心として」(『国際文化研究科論集』二四号、二〇一六年)参照。
- 【五】 『漢籍國字解全書(全四五卷)』(早稲田大学出版部、一九〇九〜一九一七年)。
- 【六】 『漢文大系(全二二卷)』(富山房、一九〇九〜一九一六年)。
- 【七】 『漢文叢書(全三九卷)』(有朋堂文庫、一九一九〜一九二二年)。
- 【八】 『国訳漢文大成』(国民文庫刊行会、一九二二〜一九二六年)。
- 【九】 『支那文学大観』については、勝山稔「白話小説受容史から見た『支那文学大観』の位置付けについて——文言・白話小説の受容方法を中心に」(『国際文化論集』二三号、二〇一五年)、及び「白話小説受容史から見た『支那文学大観』の位置付けについて——『支那文学大観』の停刊と共立社の関係を中心として」(『国際文化論集』二四号、二〇一六年)も参照されたい。
- 【十】 伊藤貴磨「西遊記物語」(世界名作劇場)(童話春秋社、一九四九年)、『中国童話集』(世界童話文学全集一四)(講談社、一九六〇年)、『少年少女世

界の名作文学(四四・東洋編三三)(小学館、一九六五年)。

- 【十二】今東光訳『桃花扇』(支那文学大観五・六卷)(支那文学大観刊行会、一九二六年)。

- 【十二】『今氏易学史』(紀元書房、一九六六年)。

- 【十三】『今古奇観』卷三五の翻訳は、駒田信二編『今古奇観(下)・三言二拍抄』(平凡社、一九五八年)所載の伊藤漱平訳(二三三頁)を引用した。

- 【十四】『今古奇観』(支那文学大観十一卷)(支那文献刊行会、一九二六年)六一〜六二頁参照。

- 【十五】同右一六五〜一六六頁参照。

- 【十六】『日本児童文学大事典』(大阪国際児童文学館編、大日本図書、一九九三年)。

- 【十七】注三参照。

- 【十八】『西遊記物語』(童話春秋社、一九四九年)は、一九五四年に童話春秋社少年読物文庫として再刊されている。

- 【十九】『西遊記(全三冊)』は一九八六年に岩波少年文庫(三〇二三〜三〇二五)として、二〇〇一年に岩波少年文庫(五四七〜五四九)として再刊されている。

- 【二十】『少年少女世界の名作文学四四(東洋編三三)』は同四五(日本編一)と合冊して『少年少女世界の名作文学(二三三)』(小学館、一九七四年)に再刊されている。

- 【二十一】井上浩一「西遊記翻訳史における伊藤貴麿の位置」『国際文化研究』(二二号、二〇一四年)。

- 【二十二】中国古典文学全集『西遊記』下巻(平凡社、一九六〇年)の「あとがき」には「明治・大正・昭和を通じ、西遊記を扱った書物は、少しく誇張して言えば、雨後のたけのこの如く生れたが、それは前記『絵本西遊全伝』

の複刊か、もしくはその焼直しであり、その訳業は、ほとんど前進を見なかった」とあり、鳥居久靖「わが國に於ける西遊記の流行…書誌的に見たる」(『天理大学学報』七二、一九五五年)も、「画本西遊全伝」の翻刻本、特に帝國文庫の出版によって、大正から昭和にかけて、「わが國に於ける西遊記の代表的地位を獲得」し、当時の日本の西遊記の「ほとんどが画本に拠っている」と言う。

- 【二十三】新島翠「原典訳『西遊記』と商務印書館『小学生文庫』」(『中国児童文学』一七、二〇〇七年)参照。なお、筆者の知る限り、現在方明が改編した『西遊記』の原本を見ることはできない為、原文の確認は、臺灣商務印書館刊行「増訂小学生文庫」(一九六六年)を用いて行った。

- 【二十四】『少國民の友』第一八卷第一号(一九四二年)から第二〇卷第五号(一九四三年)の連載をまとめたもの。佐藤春夫の翻訳については、代筆の問題などもあるが、ここでは伊藤訳の比較対象として用いるだけなので、この問題には触れず、佐藤春夫訳として扱う。

- 【二十五】中野美代子訳『西遊記(一)』(岩波書店、岩波文庫赤二〇・一、二〇〇五年)による訳文。以下訳文の引用はこれに従う。

- 【二十六】通行本の『西遊真詮』や『西遊証道書』には無い傍線部③が訳されていることから、繁本の系統だとみられるが、どの版本かまでは確定できない。方明本を使用した可能性も考えられるが、ここでは繁本で最も一般的な李卓吾評本だと仮定して論を進める。

- 【二十七】石山福治『支那語辞彙』(文求堂書店、一九〇五年)、同氏『日漢辞彙』(南江堂書店、一九〇八)、同氏『支那語大辞彙』(文求堂書店、一九一四年)、同書『再補版』(一九一六)、同氏『日支大辞彙』(文求堂書店、一九一七年)、同氏『最新支那語大辞典』(第一書房、一九三五年)。

- 【二十八】井上翠『井上支那語辞典』(文求堂書店、一九二八年)。

- 【二十九】 竹田復の『支那語新辞典』（博文館、一九四一年）。
- 【三十】 愛知大学中日大辞典編纂処『中日大辞典』（大修館書店、一九六八年）。
- 【三十二】 塩谷温『支那文学概論講話』（大日本雄弁社、一九一九年）。
- 【三十二】 宮原民平『支那小説戯曲史概説』（共立社、一九二五年）。
- 【三十三】 勝山稔「『三言』『二拍』発見者再考」（『中国古典小説研究』一三、二〇〇九年）参照。
- 【三十四】 魯迅著・増田涉訳『支那小説史』（サイレン社、一九三五年）。
- 【三十五】 塩谷温『支那文学概論』（弘道館、一九四六年）。
- 【三十六】 勝山稔「白話小説翻訳史における宮原民平の存在について——『支那文学大観』の事例を中心に」（『アジア遊学』一〇五号、二〇〇七年）。